第46号　50円
昭和52年1月25日

内容

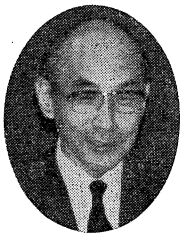
アメリカ社会理解の前提…… 1
開館十周年記念募金委員会…… 2
開館十周年お祝い募金終る…… 2
千人会報告…… 3
故大浜信泉先生追悼記念会…… 4
第85・86・87回大学共同
セミナー……6～8
永井文部大臣，学生に講演…… 9
館長日記から……11
業務通信…10　利用状況…11～12

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
<所在地>
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京 74590番
<東京事務所>
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241)3961
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

アメリカ社会理解の前提
——時間・空間・人間——

東京大学教授
斎藤 眞



アメリカ研究といわず、およそ外国研究は比較研究といえよう。日本人がアメリカ研究を行う場合、言語の壁、文化の差、日米関係の重さなど、いく多のハンディキャップがあるが、他面異なった文化圏に生きているだけに比較という視座をもちえるはずである。かつてトクヴィルがアメリカ研究の古典である『アメリカにおけるデモクラシー』をものにできたのも、彼がヨーロッパ社会・文化に対する深い理解と、祖国フランスの将来に対する鋭い問題意識とを持っていたためにほかならない。今、独立二〇〇年のアメリカを理解するのに基本的前提ともなるべきことを、他社会との比較を意識しつつ、時間・空間・人間の三点にわたって考えてみたい。

アメリカは独立以来わずかに二〇〇年、最初のイギリス領植民地の設立（一六〇七年）からでも三七〇年程にすぎない。日本でいえば、徳川幕府以降の歴史である。このことは、ヨーロッパと対比していえば、アメリカ社会はほぼ近代と共に始まったといえる。いいかえれば、封建社会、絶対主義社会はヨーロッパに置いてきて、近代社会として形成された。「アメリカ人の原型」フランクリンは、また典型的近代人でもあった。フランクリンに象徴されるように、身分制の障壁なしに、アメリカ人は相対的にはそのエネルギーを十二分に発揮できたことが、アメリカの急速な発展の一つの理由であろう。

この「歴史の若い」アメリカ社会は逆説的ながら、またすぐれて「伝統的」「保守的」な社会でもある。アメリカの政治体制を定めた憲法は一七八七年起草、今日まで続いている。つまり、アメリカは世界の最古の成文憲法をもち、一八世紀より基本的には同一政治体制を維持してきた。その点ヨーロッパ史におけるような体制の変改を経験せず、体制の継続が当然視されてきた。アメリカは近代と共に始まったが、それ故にまた近代しか経験せず、その点近代が超歴史的なものとしてとらえられやすい。自由主義社会と共に始まったが、自由主義社会しか経験せず、そこに自由主義がその相対化の機能を失って、絶対化されるという逆説を生みやすい。あるいは、他の「変改」に無理解となりやすい。

アメリカの空間を考える場合、アメリカ内の空間の広大さと共に、アメリカの外をかこむ空間の広大さに注目する必要がある。地上の国境線で他国と接するヨーロッパ諸国と、大西洋という広大な空間でヨーロッパ諸国と隔絶されたアメリカとでは、国際政治へのかかわり方が当然異なってくる。アメリカは大西洋（そして実はヨーロッパの勢力均衡）のおかげでヨーロッパの権力政治にかかわらないですんできた。大西洋という「無償の安全保障」のおかげで、アメリカは「孤立主義」を享受しつつ、アメリカ大陸へ膨張発展し大陸国家としてのアメリカが形成される。と共に、大西洋を媒介としてヨーロッパ文明と異なったアメリカ文明という意識をもち、そのアメリカ文明をアメリカ大陸に広めるという文明宣教の意識をもつ。

一九世紀前半農業国として外延的に拡大したアメリカは、南北戦争後この広大な空間を工業用市場として内包化する。そのためには鉄道は決定的な重要性をもつ。アメリカの工業化は「脱農業化」ではなく、広大な国内空間を背景に農業と相互補充的関係において進行し、一九世紀末に世界一の工業国になる。その時、国外空間が着目されてくる。太平洋が隔絶の空間としてではなく延長の空間として注目され、事実米西戦争を契機に海洋国家としてのアメリカが形成される。

アメリカ人の人種的多様性はよく知られている。しかし、それと共に重要なことは、いわゆるインディアンを除けば、アメリカ人とはすべて外よりの移住者であることであろう。その観点から見る時、インディアンは「最初のアメリカ人」、先住者として、他のすべてのアメリカ人と質的に異なる。アメリカ史とは、一面ではこの先住者と後来者との戦いであり、後者による前者の駆逐の歴史ともいえる。また、黒人奴隷は移住者であるが、自己の意思に反して強制的に移住せしめられたものとして、他の一切の移住者（日本人移民を含めて）と異なる。さらにこれらの移住者としてのアメリカ人社会には、ヨーロッパ的身分制の壁はないが、移住民族間の（これは移住した時間の早さ、遅さにもよる）微妙な壁が存在する。

人種的統合性（生物学的統合性）を欠くアメリカ社会は、他の社会より人為的な統合をより必要とする。その統合の契機として、アメリカ的信条、アメリカ的生活様式が重要になる。アメリカ化と

（3頁へつづく）

開館十周年記念募金委員会
稲山新日本製鉄会長を委員長に推して発足

稲山嘉寛氏

所要の資金三億円のうち二億円を財界・業界の寄付に一二〇〇万円を個人の寄付に

昭和40年7月5日に開館式を行い、同50年11月1日には開館十周年記念式典と大塚久雄、板垣與一両教授による記念シンポジウムを行い、理念の深層を現実に移しながら十年の歴史をつくった。

この十年間に学部学生を対象にしたセミナー・ハウスは、次の十年には、セミナー・ハウスの存在理由を問いながら新分野を開拓し時代と共に歩むことを決意した。

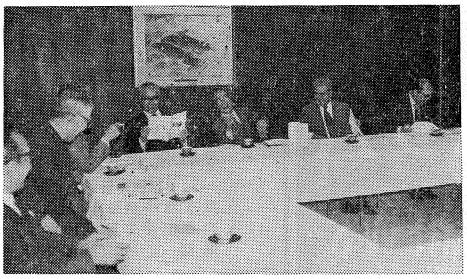
次の十年を目指して施設の拡充を図ることとし、新たに大学院教育と国際交流教育の二つの分野に活動範囲を拡大することとした。

所要の資金三億円をいかにしてつくるか。文部省、日本自転車振興会などの補助金を要請するとともに、創立以来の縁故から、財界の有力者に募金委員会の設置を懇請すること、および広く社会の個人に協力を仰ぐこととした。

昭和51年6月7日、経団連貴賓室において、新日鉄会長稲山嘉寛、三井銀行会長小山五郎、野村證券会長瀬川美能留の財界人三氏と当法人側から正田理事長、茅元館長、飯田館長が参加し、募金委員会の設立準備会を催した。常任委員一〇名、委員二五名を委嘱し、それぞれ承諾を得て、経済界不況の中ではあるが、募金運動を開始する手順を完了したのである。

昭和51年10月28日には経団連会館にて常任委員、委員各位の出席を仰いで、第一回募金委員会を開き、二億円募金目標達成についての方法を協議した。

▼十周年記念事業＝四つの施設
一、大学院セミナー館
二、国際交流活動のためにA＝オリエンテーションセンターB＝内外の学者、研究者の宿舎
三、交友館（学会事務室、学生のコモン・ルームとして）


第1回募金委員会――右より，佐々木富士銀行会長，小山三井銀行会長，稲山新日鉄会長，茅終身理事，正田理事長

◇開館十周年記念お祝い募金報告＝第六報＝終了

目標額…三〇〇万円
募金額…三一九万九、四二六円
（11月30日現在）

◇ご支援に感謝します

10・11月分＝四五八、二一〇円

三、三一〇円　上智大学助教授　河崎瓊二殿
二、〇〇〇円　明治大学助教授　松瀬貢規殿
一、〇〇〇円　立教女学院短大教授　高桑啓介殿
五、〇〇〇円　津田塾大学教授　大東百合子殿
三、〇〇〇円　国際基督教大学教授　青柳清孝殿
五、〇〇〇円　普連土学園理事長　布川角左衛門殿
一、〇〇〇円　日本看護協会研修生　金　升子殿
四、四〇〇円　募金箱より
三、〇〇〇円　早稲田大学教授　栗原朋信殿
一〇、〇〇〇円　大正大学教授　塩入良道殿
五、〇〇〇円　早稲田大学教授　福井重雅殿
五、〇〇〇円　二松学舎大学教授　大谷光男殿
五、〇〇〇円　東京大学助教授　武田幸男殿
一〇、〇〇〇円　国学院大学教授　小林　宏殿
二、〇〇〇円　当ハウス元職員　豊島広司殿
二、〇〇〇円　東京女子大学教授　小河原正己殿
一〇、〇〇〇円　SPORE研究会殿
三、〇〇〇円　東京大学教授　諸井勝之助殿
五、〇〇〇円　日本大学瀬在ゼミ殿
九、八四〇円　第13回大学教員懇談会参加者一同殿
五、〇〇〇円　東京外国語大学助教授　中嶋嶺雄殿
二、一〇〇円　東京外国語大学　中嶋ゼミ殿
三三七、六五〇円　ピアノ募金より残高繰入れ

開館十周年お祝い募金
有終の成績で11月に終る

●寄付金総額　三、一九九、四二六円
●現在支出総額　二、八三三、五九〇円
●支出予定額（残額）　三三五、八三六円

♣

【主なる支出項目】

A　遠来荘の茶道具、造園、什器　五六〇、三一〇円
B　本館・ラウンジの応接セット、囲碁、将棋セット　一、〇六九、一五〇円
C　講堂のプロジェクター　二七一、〇〇〇円
D　マイクなど　大学院セミナー館の机、椅子　三四九、〇〇〇円
E　教師館の温水器　三七一、三〇〇円
F　企画室の接待用茶器類、椅子、机　三三三、九二〇円
G　これからの予定　フロントの備品、遠来荘の庭造り　三三五、八三六円

♣

開館十周年をご利用下さった方方を始め、たくさんの協力者から、このようにお祝いしていただけたことは幸せであった。これこそ何にもまさる十周年の祭壇に捧げる贈りものである。本当に十年の「よしみ」を具現化された貴重な寄付金であった。

本号には最終の寄付者をご報告して、併せてお祝い募金によりそれぞれの設備が改善され、利用者に対するサービスが一層よくなったことをご報告したい。

なお、この開館十周年記念お祝い募金は、使用目的が同一であることから40号で既にご報告ずみの開館十周年記念映写機購入募金を引き継ぐことにしたため、決算上の総額は次のとおりであることをご報告し、数々の善意を永く記憶することにしたい。

総合計額　三、八四五、四二六円

千人会＝会員増加運動＝第六報＝昭和51年10～11月

◇現在会員は一、三四三名です

大学人＝一、〇六三名
社会人＝　二八〇名
（51年11月30日現在）

♥入会のこころ

十年前、東京学芸大在職時代に親しくさせていただきました。開館一周年のお祝いでしたか、立派な集会を共にしたことをなつかしく思い出します。

明治大学教授　萩原龍夫

◇新しく会員となられた方々

22名〔第35回報告（申込順）〕

B　慶応義塾大学専任講師　沢孝一郎殿
C　千葉敬愛短期大学講師　尾田綾子殿
C　座間市立東中学校教諭　山口清隆殿
C　白梅学園短期大学教授　北　郁子殿
B　国立東京高等専門学校教授　芹沢正三殿
C　日本女子体育短期大学助教授　日高精二殿
C　東北大学教授　渡利千波殿
A　明星大学教授　梶木隆一殿
C　東海大学教授　栗本　弘殿
B　明治大学教授　萩原龍夫殿
A　明治大学教授　小松八郎殿
C　明治大学教授　下出積與殿
A　東京外国語大学教授　北村　甫殿
B　早稲田大学教授　小原啓義殿
C　早稲田大学教授　木村建一殿
C　立正大学助教授　高村弘毅殿
A　早稲田大学教授　鹿島次郎殿
C　明治大学助教授　亀山照夫殿
C　明治大学助教授　松瀬貢規殿
C　茶道教授　田所光子殿
B　東京外国語大学教授　竹内与之助殿
A　慶応義塾大学助教授　井関利明殿

♥千人会会員からのたより

還暦となりました。自らそれを記念して今回は特別の〝会費〟をお送りします。明春東大を定年で去りますが、今後とも国際法の研究と教育を続けます。セミナー・ハウスの希望の灯がますます強く明るくなることを期待しています。

東京大学教授　高野雄一

◁

本年度は当初年度でもあり、かつ癌克服の快気のしるしとして、B会員ではありますが倍額を送らせてもらいます。

専修大学教授　高橋七五三

◁

貴「ハウス」が月と共に著しく充実していくことは、将来を負う若者がセミナーに活用する場としてその成果を一層期待できることであります。大学人として、また国民の一員として、日本のためにも嬉しく存じます。

早稲田大学教授　伏見　弘

◁

相変わらず新聞記者稼業を続けています。ただし5月末より余儀なく改姓いたしました。飯田先生のご健康をお祈りしています。

日本経済新聞記者　牧内　操（旧姓　羽根田）

◇会費ありがとうございます

昭和51年10～11月（敬称略）

平野敬一、木村富夫、北澤佐雄、出居茂、冲中重雄、佐藤康男、川村亮、今井淳、中島斌雄、内ヶ崎賛五郎、大須賀政夫、増田四郎、重田信一、宇津木章、久武雅夫、筑波常治、井上勝也、田中昭二、大束百合子、鈴木喬、神田信夫、平沢興、高橋泰蔵、安達義明、栗原照子、佐々木克己、東条秀光、大村政男、大竹誠、加藤一郎、森脇大五郎、田村献、岡茂男、江尻美穂子、松岡八郎、野田良之、八木江里、鈴木満、永澤越郎、山田芳孝、石川静一、小川芳男、板垣與一、鳥居泰彦、飯吉厚夫、藤永保、助盛晴、森岡清美、大友昌子、鈴木順子、横田洋三、竹村憲郎、小田中敏男、満尾寿男、松延博、戸塚元吉、大坪秀二、外池正治、堀信一、清水英夫、高橋三郎、末永国明、藤村瞬一、小河原正己、森井真、石川正一、佐原六郎、伊藤成彦、宇野重昭、田端光美、磯部浩一、小野沢精一、稲田拓、小田滋、佐藤方哉、岩浅武雄、鶴岡義一、戸田盛和、白井常、牧内操、武者小路公秀、中島文夫、貝塚爽平、杉澤新一、宮部菊男、山本登、山岸健、坂野観司、山科高康、秋田成就、黒田成俊、内田章五、若林俊輔、中岡和子、笹島恒輔、高野雄一、山本大二郎、前田陽一、湯本孝、田中外次、伯東㈱、井門富二夫、宮崎繁樹、福田隆義、飯田恵、玉虫文一、池上秋彦、山口喬、岡本定次、岩下秀男、外池孝雄、三輪光雄、祖父江孝男、吉武泰水、中尾由矩子、衛藤瀋吉、高橋七五三、加藤信明、飯野利夫、小野茂、馬場明男、高木仁、宇野義方、吉沢英子、正路徹也、佐藤共子、宇川和子、バッケス・ジャン、村井資長、田原虎次、山崎典、金田品二、小川捷之、渡辺仁、飯田芳男、萩原龍夫、細田友雄、増田義男、水野伝一、江上不二夫、薄衣佐吉、大須賀節雄、松元文子、木村久男、森繁雄、矢澤修次郎、阪田正三、近藤保、安藤瑞夫、勝木保次、相馬勝夫、松本樺太、青木生子、木下是雄、坂口順治、江副敏生、斎川仁、岡惺治、小松八郎、飯島宗享、伏見弘、宮崎犀一、松田稔子、矢内喜久子、北郁子、山口清隆、大貫一、石川吉右衛門、川原栄峰、渡利千波、飯田八千代、徳久球雄、岡島真理、田島賢一、天利長三、田所光子、竹内与之助、井関利明

寄付金報告(1)

51年11月現在

＜一般寄付金＞

三、〇〇〇円　石井栄治殿
三、〇〇〇円　森永牛乳由木配給所殿
二、〇〇〇円　絹ヶ丘子供会育成会殿
三、〇〇〇円　高嶺団地子供会育成会殿
二、〇〇〇円　南大沢踊り会殿
五、〇〇〇円　館長　飯田宗一郎殿
三、〇〇〇円　河田徳子殿
五、〇〇〇円　㈶関西地区大学セミナー・ハウス殿
一〇、〇〇〇円　鮎川社中一同殿
一〇、〇〇〇円　㈱東京シューズ会長　小俣喜久治殿

＜植樹基金＞

七、〇五〇円　産業能率短期大学能率学スクーリング殿
一〇、〇〇〇円　㈱明治屋殿
一〇、〇〇〇円　早稲田大学教授　竹内理三殿

＜図書基金＞

七、〇四〇円　第86回大学共同セミナー参加者一同殿

（第85回大学共同セミナー全体講義より。文責編集者）

（1頁よりつづく）

は、元来移住者がアメリカ的価値に同化することをいった。その点、アメリカ的価値の基本である自由は統合の主要な契機であり、自由は統合の象徴となって、時に自由の実体を失う。

独立後二〇〇年、外にヴェトナム戦争、内に人種紛争の挫折体験を経たアメリカは、やはり一つの転機を迎えているように思える。時間的にも過去との断絶を、空間的にも限界を、人種的にも亀裂を体験しつつ、アメリカは解体でもなく、復原でもなく「脱皮」し、「成長」して、第三世紀を迎えようとしているといえよう。

元理事長 故大浜信泉先生追悼記念会

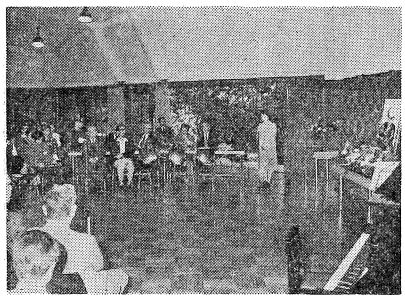
「古代東アジア史上の日本」をテーマとする共同セミナーを捧げて——昭和51年10月23日

昭和51年2月23日、当ハウス創立の功労者の一人、元理事長大浜信泉先生が逝去された。

当ハウスは最もふさわしく先生を追悼すべく、第86回大学共同セミナー「古代東アジア史上の日本」を開催した。そのプログラムの中で23日の午後、大浜英子未亡人をはじめ、多数の来賓を迎え、共同セミナー参加学生の出席のもとに、おごそかにもうるわしい追悼の集いが行われた。

開会に先立って、大浜夫人と来賓が「大浜岬」公園で記念撮影をし、会場の講堂に向かわれた。

追悼の集いは2時40分、早大OBの小山敏博君によるピアノ奏楽をもって開始された。先生のお写真が講堂正面にすえられ、美しい生花の中で温顔が語りかけておられるようであった。まず正田理事長の挨拶、次いで飯田館長が、一七年にわたる先生の当ハウスとのかかわりとご功績について語り、さらに、今や利用者が延四〇万人を突破し、国際的にも広がりつつある当ハウス発展の現状を報告した。



挨拶に立つ大浜英子氏

次に、大浜先生が開館五周年記念式典と、先生の八〇歳のお祝いの会で語られた肉声をテープで聴いた参加者は、あたかも先生が直接語りかけておられる想いで、セミナー・ハウス創立の頃のご苦労と先生の温いお人柄を偲ぶことができた。ここで、国立音大三年生の西村陽子さんのヴァイオリン演奏によって、ベラチーニのコンチェルトソナタを聴き、先生への哀惜の情を新たにした。

次いで、来賓として茅誠司氏、早大総長村井資長氏、同大教授川原栄峰氏、同吉阪隆正氏、卒業生代表として一橋大学OB柴田泰比古氏、学生代表として早大四年滑志田隆君から追悼のメッセージがあった。（別掲参照）

最後に大浜英子夫人は、「このような記念会を、故人と親しくしていただいた先生方やたくさんの学生さんの温いお心でお開きいただき感謝で一杯です。故人は飯田先生の強引さには困るといいながら実は本人も同じ夢を持っていたのだと思います」と挨拶された。

当日は前記来賓の他、東京教育大名誉教授三輪知雄氏、早大教授示村悦二郎氏、元大正海上火災保険社長山根春樹氏、元中大総長升本喜兵衛氏、旧職員の豊島広司、土田美芳、飯田恵の各氏、設計担当者松崎義徳氏、学生年輪の会の学生たちが出席された。

4時から大学院セミナー館でお茶の会が行われ、追想の話合いは夕刻まで続いた。

●追悼のメッセージから

●村井資長（早大総長）

大浜先生は早稲田を愛し、非常に大きな力を尽くされましたが、現代の大学というものに非常にご不満というか、何とかしなければならないという強い気持を持っておられました。そのため、一つの大学をよくすることも大切だが、それを越えて大学間で協力し、学生が交わり、先生と学術的な討論が行われるべきだとの熱意を持っておられたことが、大学セミナー・ハウスに力を入れられた所以ではないかと思います。

石垣島という南海の孤島でお生まれになり、東京で生涯を終えられた先生は、非常に大胆であられ、良いと思われることは誰が何といおうと進められるという性格でしたので、これだけ大きな仕事をいろいろとなさったと思います。

セミナー・ハウス創立の頃、私も永井さんが委員長であった企画委員会の一員として企画に参加したり、吉阪さんがなさった建物の設計も見て参りました関係で、私にとってもこの場所はことの外なつかしく、日本の大学の一つの新しいいき方を示す大きな働きとして、大変敬意を表していますし、大浜先生にも感謝している次第です。

●川原栄峰（早大教授）

大浜先生のお声をテープで聴いて感激を新たにしました。私は、この二つのテープのお話は、両方とも生で聴きました。

飯田先生が、茅、大浜、上代という三人の大先生を何度も訪問しておられた頃だと思いますが、ある日、私は大浜先生から「大磯に行け」といわれました。何のことかよくわからずに出かけたのですが、各大学の先生方が集っておられ、今にして思えば、その会合が大学セミナー・ハウスの理念の事実上の旗あげだったのです。

またしばらくして、先生から「八王子に行け」といわれ、来てみましたら、立派な建物ができていたというわけです。

それ以来、私は何度も共同セミナーに参加し、茅先生、上代先生、正田先生を始め、教育界、学会の立派な方々のお話を聴き、ご挨拶する機会を得、また各大学のすばらしい学生たちと知りあい、本当に私にとってよい勉強になりました。

大浜先生が主宰なさる教授会や学部長会議等で感じたことですが、唖然とする程頭の良い方で、他の人の話を分析し、整理して、それぞれに対して、ご自分の考えを明確にいわれるなど、私の知る人の中で最も頭の良い方と思っております。あの分析と統合、あの明晰さ、それが八〇歳を越えてなお衰えることがなかったことは驚くべきことです。先生のご冥福をお祈りいたします。

●滑志田　隆（早大学生）

私が大学一年のとき、ここで開館六周年の記念セミナーが今日と同じく東アジアのテーマで開催されました。その時、先生の八〇歳のお祝いのパーティがあり、今テープでお聴きしたように、先生はご機嫌よく奥様のことをほめちぎっておられました。

この折りに私は臆面もなく先生に質問したいことがあるので、お時間を下さいと申しあげました。

それは先生の生地石垣島に私が東洋史学への興味から、狩猟民や漁民の伝承を知ろうと滞在していたとき、「美しい自然が破壊されていくので、大浜先生に逢ったら是非このことを申しあげてほしい」と島民からいわれていたからです。

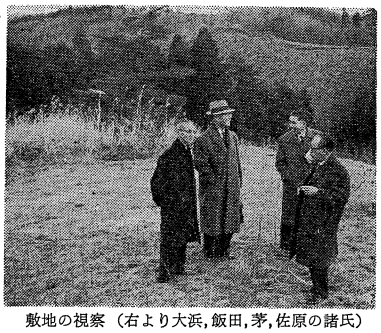
先生にこのことを申しあげたとき、「よし、わかった」と一言低い声でお答え下さいました。その後、国民的運動が起こって、石垣島は国立公園の中に指定されました。

大浜先生は、海洋博においても環境の中で生きていく人間、自然を大切にしながら生きていく日本というテーマをお持ちでした。そして最も熱心にそれを実行された方だと信じます。

思い出のアルバムから

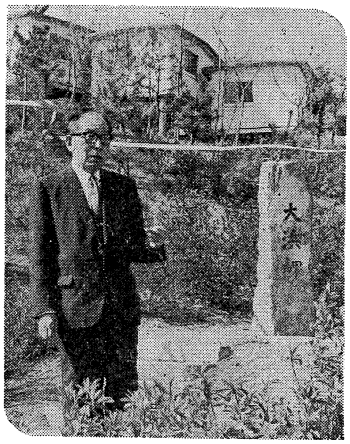
クリスマスの集いで（昭和42年12月20日）

←「創立十年史」出版記念会で祝辞を述べる

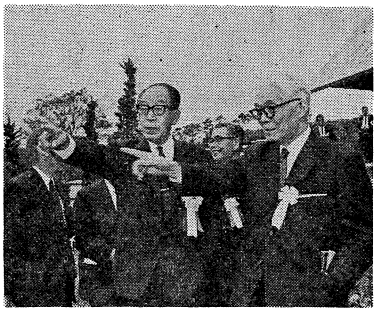


敷地の視察（右より大浜，飯田，茅，佐原の諸氏）

開館７周年記念式典（右より増田四郎，村山松雄，三笠宮，飯田，大浜，越智勇一の諸氏）



大浜岬公園完成の日に



落成式（南原繁先生に建物の説明をする）

私と大学セミナー・ハウス

大浜信泉

大学セミナー・ハウスは、この七月五日をもって開設三周年を迎える。その記念というほどのことではないが、大食堂の壁面に額を掲げて風致をそえてはとの議が起こり、私にその染筆を命ぜられた。生来の悪筆でとうていその任でないことは誰よりもよく自覚しているが、セミナー・ハウスが生まれ出るについて産婆役をつとめた縁故もあるので、あえて恥をさらすことにした。

思想は高潔に、生活は簡素に、これが指示された句である。セミナー・ハウスはこの理念によって運営されて来たし、また知識人の生活のモットーとして、もっとも適切な句といってよいであろう。

いまさら説明するまでもなく、このセミナー・ハウスは、専務理事飯田宗一郎氏の着想に基づくものである。はじめてその構想を聞いたとき、現代の大学教育に欠けているものを補う意味で、まことに望ましいことではあるが、さてその実現となると、まったく雲をつかむようなもので、正直なところ自信がもてなかった。

思想は高潔に
生活は簡素に
信泉書

ところで、人間の一念はおそろしいもので、飯田氏の執拗なほどの熱心な勧誘によって、大学の関係者の間にだんだん共鳴者が増えこれに対応して財界にも応援者が現われて、とにかくあれだけの施設が出来あがり、さらに年を追うて拡充されつつあるのである。

大学で学ぶことの尊さは、それぞれの専門分野について体系的な知識を学習することのほか、研究方法の体得すなわち学問の仕方の訓練、教員との人格的接触、学友との魂のふれ合いによる人間形成、さらによき友を作ること等にあるといえよう。セミナー・ハウスは、この目的に適合した場を提供し、もっともそれにふさわしい雰囲気の醸成することを指向しているが、この関連においてセミナー・ハウスには、個々の大学に求めることの出来ない大きな特典がある。他大学の有名な学者に直接接触しその指導と感化を受けることができるほか、学問を通じての交友の範囲を他大学にひろげ、多くのよき友人を作ることが出来ることがそれである。

大学セミナー・ハウスは、奇蹟的に出現したが、この上は、その機能と成果の上に奇蹟の現われることを期待してやまない。

（セミナー・ハウス第14号「開館三周年と私の期待―標語の額面にそえて―」より）

◇大学セミナー・ハウスとの関係

昭和
三四年三月六日　早稲田大学総長室に飯田宗一郎が訪問
三六年七月二一日　大浜信泉、茅誠司、飯田宗一郎が三井銀行会長佐藤喜一郎を訪問
三六年一一月三〇日　財団法人大学セミナー・ハウス設立発起人会
三七年一月二〇日　大浜信泉、茅誠司、佐原六郎、飯田宗一郎が現在の敷地を視察
三七年一月二九日　大浜信泉、飯田宗一郎が土地の所有者京王帝都電鉄社長を訪問
三九年一〇月三日　理事長に就任
四〇年七月五日　開館式に出席
四〇年一一月一日　落成式に出席
四三年六月二九日　大浜岬の命名
四七年三月一六日　大浜岬公園完成
四七年一一月一八日　開館七周年記念式典に出席
最後の公式出席
（八王子）昭和四九年一一月九日　佐藤喜一郎氏追悼記念会
（都内）昭和五〇年三月一七日「創立十年史」出版記念会（工業倶楽部）
五一年二月一三日　午後三時三八分逝去（八四歳）。

第85回大学共同セミナー

主題——アメリカ＝現代文明の試練

—独立二百年の理想と現実—

期日——昭和51年10月8～10日

＜全体講義＞

アメリカ社会理解の前提
—時間・空間・人間—
東京大学教授　斎藤　眞氏

＜総合シンポジウム＞

第三世紀のアメリカ：試練と展望
—日米関係の将来をふくめて—
指導教授全員

＜ゲスト講演＞

私のアメリカ体験
法政大学教授　袖井林二郎氏

＜セクション演習＞

A　アメリカ独立革命
—独立か革命か—
東京大学教授　斎藤　眞氏

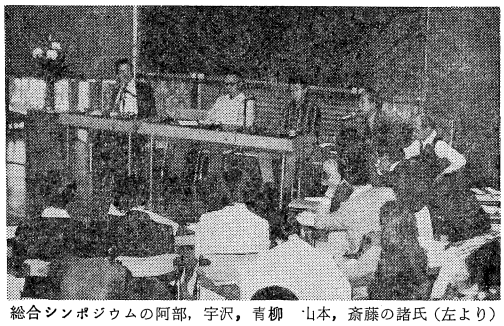
B　アメリカの経済
—その制度的考察について—
東京大学教授　宇沢弘文氏

C　アメリカン・デモクラシー
—その論理と現実—
成蹊大学教授　阿部　斉氏

E　アメリカの少数民族
—新しい統合は可能か—
国際基督教大教授　青柳清孝氏

F　国際関係のなかのアメリカ
法政大学教授　山本　満氏

＜参加学生＞　104名(内女子50名)
東大(16)、津田塾大(11)、東外大、ICU（各10)、慶大（9)、早大(7)、筑波大、独協大、東京女子大(各6)、東工大、成蹊大、中大、日女大、同志社大(各2)、千葉大、東京医歯大、お茶の水女大、一橋大、都留文科大、跡見学園女子大、学習院大、上智大、聖心女子大、法政大、立教大、フェリス女学院大、同志社女子大(各1)、合計27校



総合シンポジウムの阿部，宇沢，青柳　山本，斎藤の諸氏（左より）

◇　◇

アメリカを主題とした共同セミナーの開催は数年来の懸案であったから、独立二〇〇年に当たる七六年にこのセミナーが組み入れられたことは当然といえば当然のことであったが、企画の中心に斎藤眞先生が参画され、また企画・運営の両面でその手腕をいかんなく発揮された山本満先生のお蔭で、別記のように歴史、経済、政治、社会、国際関係の各分野ですぐれた業績をあげておられる講師陣をお迎えして開催することができた。

短い募集期間にもかかわらず学生の反響は極めて大きく、そのいずれも「企画が時期的にみてタイムリーすぎて、〝のりすぎ〟という感もないではないが、テーマと内容を見たところ、それほど浅薄なこともなさそうだということにまず感じ入った」と記された応募理由にも見られたように、極めて真剣に〝近くて遠い国〟アメリカを学ぼうとする意欲を示していた。応募者は約一四〇名を数えたため、初参加の学生を優先し、一、二年生の参加を断わるなどして人数の調整をはかった。

参加者の中にアメリカ人留学生三人が加わっていたことは、セミナーのあらゆる部面で大きな意味を持っていたが、別掲の感想文からうかがえるように、彼らが三日間の共同セミナーで得たものも、また大きかったようである。

当初予定されていたDセクションが加藤秀俊先生のご都合で急きょ取りやめられたことは残念であったが、全体講義の斎藤先生がセクション演習も担当されるなど、指導教授全員が三日間学生と起居を共にされ、文字どおり共同セミナーにふさわしい演習を繰り広げて下さったことは、誠に幸せなことであった。

The 85th Inter-University Seminar——A Personal View

Alan Moriyama

This was not my first experience at the Inter-University Seminar House. I had previously attended Japan-America Student Conferences in 1973 and 1975, both were conducted in English. This would be my first experience in attending a seminar held in Japanese! Would I be able to understand what was going on? Would participants be serious students? Would they have both an adequate background as well as an interest in the different topics? Two days later, I realized the questions I had earlier had been answered. For one thing I found not only that I could understand what was going on, but also I found that I was able to make friends in Japanese, the latter being different and much more difficult than the former.

I was also surprised at the preparation and dedication of the student participants. They were genuinely interested in the problems facing America.

I found in the table discussion on American minority groups that I learned as much about American society from the 25 Japanese students as I could have from 25 American students.

This seminar was fortunate to have a group of students who came for the purpose of learning. Similarly, the choice of professors to lead the seminar was fortunate. Nevertheless, in my opinion, much of the success of this seminar can be attributed to the atmosphere provided by the Inter-University Seminar House and its staff. It is not often that the university students have such a chance to meet with students and professors from different universities in order to discuss serious problems. They have no chance to examine certain problems particularly on a society-wide level, or to examine problems from a multi-disciplinary approach.

Thus, it seems that the Inter-University Seminars complement Japanese universities in the very areas in which the universities are weakest. I enjoyed this seminar and look forward to attending many more in the future!

(Graduate School, University of Tokyo)

第86回大学共同セミナー

主題――古代東アジア史上の日本

大浜信泉先生追悼一周年を記念して

期日――昭和51年10月22～24日

＜全体講義＞

東アジア史からみた「天皇」号の成立
早稲田大学教授　栗原朋信氏

東アジア世界と日本
東京大学教授　西嶋定生氏

＜セクション演習＞

A　文化史からみた古代東アジア史上の日本―特に暦日上から見て―
二松学舎大学教授　大谷光男氏

B　法制史からみた日本と中国
国学院大学教授　小林　宏氏

C　中国と日本の仏教受容
―仏教史からみた古代東アジア史上の日本―
大正大学教授　塩入良道氏

D　朝鮮史からみた古代東アジア史上の日本―広開土王碑をめぐって―
東京大学助教授　武田幸男氏

＜スライドと解説＞

解放後の中国における考古美術
―美術史からみた古代東アジア史上の日本―
成城大学助教授　土居淑子氏

＜運営委員＞

早稲田大学教授　福井重雅氏

＜参加学生＞　58名(内女子22名)
早大(15)、二松学舎大(11)、筑波大(7)、東大、大正大(各4)、お茶の水女大(3)、東外大、東女大、日女大(各2)、一橋大、横浜国大、東京医歯大、慶大、青学大、明大、和光大、ICU(各1)、合計17校

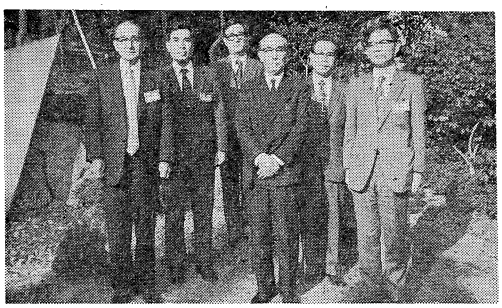
◇　◇

今回の企画は当初から福井重雅先生の手で進められ、史学会のメンバーの諸先生を講師陣に配して別記のようなセミナーが構成された。併せて、当ハウス創立の功労者・大浜信泉先生の追悼セミナーとして、故人の関係大学ということから福井先生がこの企画を担当されることになったものである。

このセミナーは、われわれ日本人の歴史の原点を中国を中心とする東アジア史との関連において再検討しようとしたものであるが、セクションのテーマがかなり細分化され、学部学生には専門的にすぎたためか、参加者が予想を下廻ったのは大変残念であった。このためEセクションに計画されていた「解放後の中国における考古美術」が中止となったが、土居淑子先生がご自分で撮影された貴重なスライドを先生の明解な語り口を通して参加者全員が鑑賞することができた。

また、初日は永井文部大臣が当ハウスに一泊されたのを機に、ゲスト講演が組み込まれ、翌二日目には大浜信泉先生追悼記念会が行われるなど、変化のあるプログラムを楽しむことができたセミナーであった。参加者の感想をアンケートから拾ってみても、ゲスト講演については、「ユーモアと皮肉に富む独特の口調で教育というまじめな問題について講演されたのには感心した」「実際に人物を拝見して、その情熱と現実性のある計画を聞き明るい気持になった」など、追悼記念会については「大浜先生の人となりと大学セミナー・ハウスの精神を知ることができた」「このような行事に参加できたことはラッキーだった」など極めて好評であった。

予定を変更して三日間とも八王子まで通われた全体講義の栗原先生をはじめ諸先生のご指導が、追悼記念会を含む三日間の雰囲気を盛り上げて下さったことにこの紙面で改めて感謝を捧げたい。



左より塩入，武田，福井，栗原，大谷，小林の諸氏

◇参加学生のアンケートから◇

♠普段、接触の限られてしまう学生達が静かな環境の中で一つの主題の下に集まって学習するということは大変すばらしいと思います。講師の先生方はもちろん、職員の方々に至るまで、われわれ学生のためにご尽力下さっていることを痛感しました。（横浜国大・経済）

♣いろいろの仕事に従事している人々が大変親切でうれしかった。敷地の整備が行き届いていて気持がよかった。大学生活がとかく不規則になりがちである中で、人間らしい生活が送れたことはとてもうれしかった。（慶大・工）

第87回大学共同セミナー

主題――宇宙

―現代宇宙像の諸問題―

期日――昭和51年11月12～14日

＜全体講義＞

宇宙―現代宇宙像の諸問題―
東京大学助教授　寿岳　潤氏

＜ゲスト講演＞

なまぐさ星の話
茨城大学教授　浜田哲夫氏

＜セクション演習＞

A　宇宙はどうしてはじまったか
―膨脹宇宙の進化―
京都大学教授　佐藤文隆氏

B　銀河
―その起源・構造・爆発―
東京大学助手　海部宣男氏

C　星は進化するか退化するか
東京大学助教授　杉本大一郎氏

D　太陽系の起源と生命の誕生
―隕石からみた惑星の起源―
筑波大学助教授　小沼直樹氏

E　宇宙の文明と地球の文明
―空想から科学へ―
杏林大学助手　横尾広光氏

F　観測で宇宙像はどう書きかえられるか
東京大学助教授　森本雅樹氏

＜運営委員＞

学習院大学教授　江沢　洋氏

＜参加学生＞　90名(内女子34名)
早大(11)、東大(8)、お茶の水女大(7)、慶大(5)、東女大、東京理科大(各4)、茨城大、東京学芸大、横浜国大、名大、成蹊大、明大(各3)、筑波大、電通大、奈良女大、都留文科大、ICU、立大、明星大、駒沢大、中大、日女大、武蔵工大(各2)、東京医歯大、東京外語大、東京農工大、東工大、山梨大、東京都立大、学習院大、津田塾大、杏林大、フェリス女学院大、女子栄養大(各1)合計34校

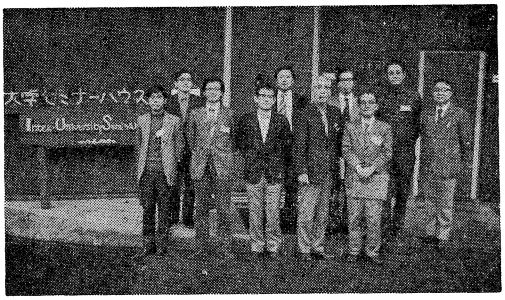
◇　◇

（大学共同セミナーつづき）

自然科学部門の共同セミナーはどうしても参加者の幅が限定されてしまうことを考えれば、今回のセミナーへの学生の反響は画期的であったといえるだろう。宇宙という言葉の響きに魅せられた人文・社会科系の学生三四名を含む合計九〇名が参加したが、応募者総数は約一二〇名に及んだ。

宇宙の全体像をとらえるために宇宙の階層別にセクションのテーマが設定され、別記のように若手の研究者を含む八名の講師陣によるユニークなセミナーが、運営委員・江沢洋先生の手で実現することとなった。

参加学生は、まず、寿岳潤先生の文科系学生にもわかるようにかみくだいて概説された全体講義を導入部として各セクション演習にのぞんだ。翌日の浜田哲夫先生のゲスト講演は「なまぐさ星というくだけた名称に対して、実にむずかしい物理の内容が含まれていたので驚いた」という感想にもみられるように、大半の参加者にとってはかなり難解だったようであるが、途中で先生方の飛び入りの質問、議論の応酬もあり、おぼろげながら問題の核心をつかむことができたようであった。



異色の宇宙セミナーを終えて

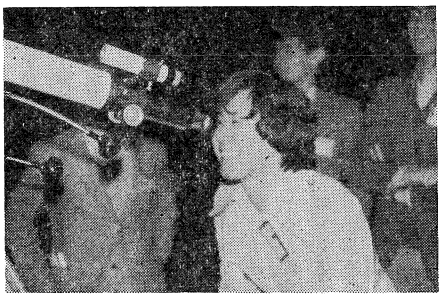
プログラムの圧巻は、やはり初日の夜に行われた天体観望であったろう。不順な天候が続いていた時期であったが、当日は幸運にも前夜の雨で洗い流された美しい夜空を仰ぐことができた。教師館の屋上に杉並区立科学教育センターより借入した望遠鏡六台がすえられ、同センター職員・伊藤昌市、天文台技官鳥居泰男両氏のお世話で参加者全員が木星、アンドロメダ星雲、スバル、月などを観望した。同時に、講堂においては、森本雅樹先生のユーモアあふれる解説で「パロマ天文台撮影天体カラー写真」のスライドが映写され、学生は交互に二つのプログラムを心ゆくまで楽しんだ。

セクション演習の話題はブラックホール、宇宙の起源などに集中したようであったが、日常の言葉で議論することは意味をなさないこと、ペーパーバック的な知識では宇宙の全体像は到底理解できないこと、などが参加者に問題点として明らかにされた。一方では、「物理学科の学生でありながら、大学にはいってはじめて物理らしいことをしたような気がする」「セクション演習Ⅲではじめて、前半に先生があのような話をされなければならなかったかを理解することができた」といったような理科系の学生の感想もあり、このセミナーを通して、ものの見方、物理学の考え方を根底から学び直す機会を得たわけで、これだけでも大きな意味をもったセミナーであったといえよう。

また、参加者の中には五年前に行われた第46回共同セミナー「自然界における対称性」で江沢先生の指導をうけた松井豊君（名古屋大物理修士一年）のような学生もおり、〝もう一つの大学〟として当ハウスを活用しながら、そこで生じた出会いを今なお大切にしている例もあった。

今回のセミナーの成功は、なんといっても各人各様、独特なキャラクターで学生をつき放すことなく宇宙の持つ魅力に引き入れて下さった指導の先生方と、まとめ役として活躍された江沢先生に負うところが極めて大きい。

このセミナーを記念して、参加者によるカンパと、先生方のご寄付で天体望遠鏡が一台購入されることになった。森本先生によって機種選定が行われている。


驚き歓ぶ——天体観望

それと「現代宇宙像の諸問題」が共謀し、踊らされたのが私たちではなかったろうか。

人間は強いものを倒すことで食物を得ていた。現在は動物や植物をかわいがることによってそれを得ている。牙をむいて闘う本能、これは人類生存に必須の崇高な本能ではなくなってきている。性欲、ことによると食欲さえもが「崇高」でなくされてきている。

「新しいことを、より深く、正しく知ろう」という本能が人類生存に不可欠なものであることを私は疑わない。「どうか、ギラギラとぎすませた本能でぶつかってきてほしい」、私は開会のときに学生諸君にお願いした。

「宇宙」「銀河」「星」「地球」「文明」「観測者」各ゼミとも、先生方が予め考えたような筋道と結論にはたどっていってくれなかったようである。特に最終のまとめをする全体集会は、内容としては物足りないものがあった。もちろん内容は大切である。先生も学生もいま一つ工夫と努力が必要だったのだろう。しかしそんなことだけで本能と本能の崇高なぶつかり合いを量ってはいけない。

共同セミナーが終ってからしばらくして出かけて行った二、三の講演会で、セミナー・ハウスで出会った学生さんをチラホラと見かけるようになった。何か糸を引いているのだろう。

舞台「宇宙」の一役者として

東京大学助教授　森本雅樹

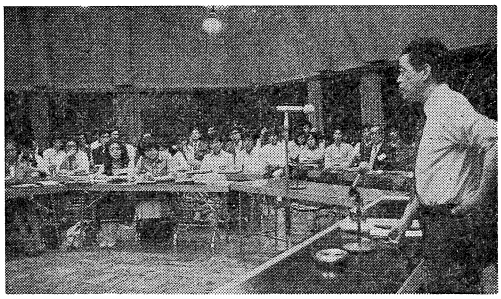
大学生のころ一緒に勉強した江沢君からこの企画を持ちかけられた私は、早速同志を募った。軍目付は海部宣男氏、目付も役者も、そしてもちろん舞台も申し分なく大学共同セミナーの幕は切って落とされた。

学生諸君も活発、先生方ものった。私もしゃべったり歌ったり大あばれ、大変愉快な舞台であった。幕間には望遠鏡を持ち込んでの天体観望というアトラクションもあった。しかしこの舞台、主役は誰だったのだろう。それは、学生諸君を時には内側から、時には背後からつついては動かした「新しいことを知りたい、学びたい」という動力ではなかったろうか。

◆永井道雄文部大臣　一泊して学生に講演

去る10月22日から開催された第86回大学共同セミナーは、別記のごとく故大浜信泉先生追悼セミナーとして捧げられたが、もう一つのハイライトは、ご尊父の関係で早稲田ともご縁の深い永井文部大臣のご来館であった。

当ハウス設立以前の昭和37年に「大学セミナー・ハウスは日本の文化に、真に大学の名に価するものを定着させる重要な役割を果たすであろう」といわれた永井教授は開館後も初代の共同セミナー運営委員長を引き受けられたばかりでなく、ご自分の東工大のゼミにも利用されるなど、最も力強い協力者、理解者として忘れてはならない方である。


永井文部大臣，学者にかえって熱弁をふるう

22日(金)、夕食時に到着された大臣は、まず学生と共に夕食会に臨まれ、一九大学一八七名の学生との交歓を楽しまれた。

次いで講堂における講演会では昔の早稲田大学の様子や大浜先生の想い出から始まり、平素から考えておられる大学論、教育論、果ては現職国会議員たちの教育への考え方に至るまで、延々二時間にわたり熱弁をふるわれた。

◇　◇

●ギターの「ひきぞめ」

永井文部大臣ご出席の当夜の夕食会で、去る10月8日から開催された第85回共同セミナー「アメリカ―現代文明の試練」に参加した一一五名の学生から寄贈されたギターが披露された。

当日、たまたまゼミで来ていた日本大学の佐野治人君がすすんで演奏をかって出て下さって、大変見事なひきぞめとなった。

寄付報告(2)
51年11月現在

＜現物寄付＞

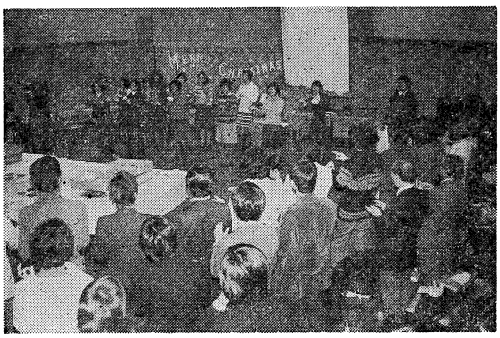
北山杉花びん　飯田宗一郎殿
栃ノ木苗木二〇本　三井生命保険相互会社八王子支社殿
ウラジロ樅の木一本　宇都宮大学殿
槇苗木一〇本　千葉大学殿
銀木せい苗木外二本　東京大学殿
檜杉苗木各一本　東京農工大学殿
雪椿苗木一本　新潟大学殿
イチイ苗木五本　信州大学殿
しだれ桜苗木二本　一橋大学殿
楠苗木二本　電気通信大学殿
梅苗木三本　茨城大学殿
紅梅　九州大学教授　中島直忠殿
飛梅　太宰府天満宮宮司　西高辻信貞殿
ギター　第85回大学共同セミナー参加者一同殿
炉縁、五徳各一　一橋大学茶道部松月会殿

▩寄贈図書
昭和51年7～8月

「アジアのお祭り」第一・二巻「Folk Tales From Asia」4　ユネスコ・アジア文化センター殿
「研究論叢」第12・13号、「研究報告」38　工学院大学図書館殿
「人間生物学」　鳥山英雄殿
「三井銀行一〇〇年のあゆみ」「続折にふれて」「佐藤喜一郎追悼録」　三井銀行殿
「だれが原子をみたか」　江沢　洋殿
「あなたの知らない心理学」　東海大学学生生活研究所殿
「野手悌士先生論述集」　中村康治殿
「安楽死論集」第一集、「社会学論叢」66　笠原正成殿
「資料・教育勅語」「資料・教育基本法」　片山清一殿
「あなたはカウンセラー」　大島一臣殿
「燎原のこえ―民衆史の起点」　筑摩書房殿
「成瀬仁蔵著作集」第二巻　日本女子大学殿
「中国現代史の周辺」小林文男殿
「ソビエト史研究入門」　菊地昌典殿
「大学の歴史と理念」　早大サークル連合殿
「生きていること」　山本秀順殿
「歌集　形相」　故南原先生一周忌記念会殿
「職業生活の社会学」北野　登殿
「平和―その現実と認識」　坂本義和殿
「カント　存在論および科学論」　門脇卓爾殿
「追想　古畑種基」　古畑和孝殿
「経済哲学の方法序説」「人生哲学と経済哲学」　瀬川　浩殿
「Essays in Cultural Criticism」　高橋源次殿
「相対性理論と常識」「偶然の本質」「反科学論」「部分と全体」「知識と人間」「一数学者の弁明」「認識の風景」「科学というもの」「知識と推測」1・2、「物理と認識」「論理学」「創造性」「PSC物理」上・下、「波動光学」「応用微分方程式論」「物理数学」「量子力学」「回転群とその表現」「一般力学」「数理科学の諸問題」「理論物理学」「物理数学」「一般力学」　山内恭彦殿
「英語展望」54　ELEC殿
「採集と飼育」8月号　日本科学協会殿
「国際交流」10　国際交流基金殿
「エッセンシャル和英辞典」「エッセンシャル英和辞典」「英和中辞典」「英和中辞典（机上版）」　旺文社殿
「劇的言語」　エッソスタンダード石油広報部殿

【クリスマスの集い】

八大学一六〇名が参加して12月18日夜9時半からクリスマスの集いを講堂で催した。色川大吉東経大教授のメッセージにつづき、学芸大有志の歌唱指導によって歓興を加えた。



●業務通信

4月から11月までの八ヵ月間で、宿泊延人員は三万四、四五九人に達し、前年同期比八%の伸びを示した。月平均四、三〇七人、一日平均一四四人となる。ゼミ回数は七一一回であった。

＊

学会、研究会の利用が増加しているのが最近の喜ばしい傾向で、10・11月両月だけでも左記諸学会が開催された。

計測自動制御学会
実解析セミナー
鉱物学綜合研究会
天体フレアー現象研究会
日本小児神経学会
日本油化学協会

中でも、電子顕微鏡など機械類を搬入して行われた小児神経学セミナーでは、スライドによる臨床報告や白衣姿の参加者による真剣な実験風景も見られた。

これらの学会で、別報「お祝い募金」によって購入したOHP（オーバー・ヘッド・プロジェクター）他の器材が活用されたのもうれしいことである。

＊

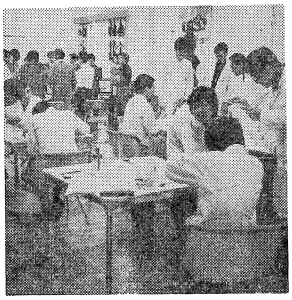
今回で第六回を迎えるこの小児神経学セミナーの幹事役をされた東京女子医科大学の福山幸夫教授は、次の一文を寄せられた。

「発育途上にある未熟脳は侵襲に対する抵抗力が弱い。そのために脳障害児の数は多く、しかも脳障害の悲劇は深刻である。精神薄弱、脳性麻痺、てんかん、重症心身障害児などの病名をあげただけで、問題の重要性を納得していただけるであろう。

このような発達途上の神経に生じた障害を研究・治療するのが、小児神経学の使命である。

小児神経学はこんな重要な学問でありながら、近年急速に開拓された新しい領域であるがために、大学で独立の講座科目になっておらず、したがって次代を担う若い医学生にとって、小児神経学の教育を受ける機会が存在しない現状である。

日本小児神経学会は、この欠陥を少しでも埋めるべく、卒業教育セミナーを企画し、昭和46年第一回小児神経学セミナーを大学セミナー・ハウスで開催した。参加者（例年一二〇人から一八〇人に及ぶ）の間で大へん好評を博し、以後毎年一回ずつ催して、今年で六回目を迎えた。


白衣姿の小児神経学セミナー風景

セミナーの会期は三日間で、その間全員セミナー・ハウスに宿泊するため、早朝から夜おそくまで時間をフルに使えるだけでなく、町のネオンから隔離され、雑事から離れて、三食とベッドを共にすることによって、全国各地の大学病院や官公私立病院の勤務医、さらには開業医が、初対面にもかかわらず、深い同僚意識を抱き、親友になれるのである。このセミナーの参加者は必ずや明日の世の中のために貢献するであろう。これもひとえに、大学セミナー・ハウスのすばらしい精神と環境のおかげと深く感謝する次第である。」

＊

この期間に、セミナー・ハウスらしい一つの〝開かれた大学〟、珍しい合同ゼミが行われた。

10月に開かれた日本女子大学社会福祉学科の小島蓉子ゼミと都立府中リハビリテーション学院の合同ゼミである。

参加者の一人、日本女子大四年の寺崎佳代子さんが、次のような一文を寄せられている。

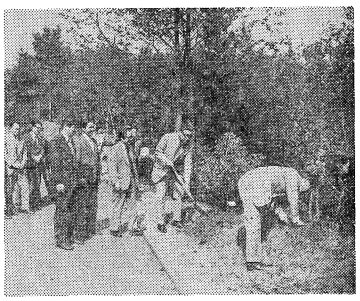
「学校、学年を越えた学生たちが、同じテーマのもとで勉強しあうことの素晴らしさを全員が感じとれたのは大きな収穫でした。

このような他校との合同ゼミを開催するのに最適の場所が、セミナー・ハウスだと思います。これからは、八王子の丘で多くの学校が、いろいろのテーマや機会を通じて、多くの学生を結びつけてくれることを期待しています。」

＊

もう一つの合同ゼミは、同じ慶応義塾大学の佐野ゼミと井関ゼミの合同ゼミで、これを企画立案したのが、当ハウス主催の大学共同セミナーに何回も参加した慶応大学大学院生井下理君であった。井下君は「合同ゼミのねらいについて」という一文を参加者に配布して、次のようにアッピールした。

「セミナー・ハウス主催の大学共同セミナーでは、他大学の学生と接触することによって、今まで気づかなかった〝自分〟を知ることができた。いろいろの意味で視野が拡大されたと思う。セミナー・ハウスの環境も、ふだんと違った〝対話しやすい雰囲気〟をかもしだしているように思われる。いつもは比較的無口な人も、ここに来てなおその習慣を維持することは難しいであろう。（中略）今後、この〝合同ゼミ〟を他のゼミ、他の学部、他の大学と開いてほしいし、外国のどこかのゼミと〝インターナショナル・ゼミ〟を開いてくれてもいいと思う。」


県木・市木の記念植樹――国立学校係長研修会

＊

▽10・11月の交歓会
（夕食どき食堂で）

①10月2日＝八大学一五四名、坂本義和教授（東京大）、小泉一郎教授（学習院大）スピーチ
②10月16日＝七大学一二七名、安藤英治教授（成蹊大）スピーチ
③10月22日＝第86回共同セミナー他六大学一四五名、栗原朋信教授（早大）、永井文部大臣スピーチ
④11月12日＝第87回共同セミナー他四大学一七七名、江沢洋教授（学習院大）スピーチ
⑤11月13日＝第87回共同セミナー他四大学一七四名、森本雅樹助教授（東京大）スピーチ

＊

10月には三泊四日で「関東甲信越地区国立学校係長研修会」が開催された。研修内容もさることながら、各校事務職員間の交流としても意義深い。三四校より七〇名の参加者は、学生への模範となるような真面目な勉強をされ、当ハウス飯田館長も講師として協力された。

この研修会の最終日には大空の下で〝植樹祭〟がもたれた。幹事校の一橋大、電通大の方々の気転で、予め知らせをうけた各大学の参加者は、それぞれの地の県木・市の木を持ち寄られた。近来稀れに見る記念植樹祭であった。

□千里同風祈上候　みのとし元旦――●館長日記から●

◆大みそかの夜に松下館屋上にのぼり、ベルタワーの真理の鐘をつくことをもって、私は除夜の鐘つき行事としている。いつしかそれが経験法則となって、真理の鐘をつくことが私の新年を迎える慣わしとなった。それはまた、自分の健康度を確かめる一つの方法でもある。◆開館十二年目の鐘つきをしてから、二万三千坪の構内を一巡した。同行者の一人がU研究室の建築設計者の松崎義徳氏であったことは、同氏とのご縁がいかに深いかを示すものである。◆冒頭の新年の挨拶の文言は、千人会員筑波常治先生からいただいた年賀状のものである。どなたも年末に年賀状を書くことは苦労らしいが、それかといって容易に廃止できないのも、新年第一日目にいただく年賀状が、人生におけるその人との出会いを改めて新鮮なものにしてくれるからである。私は1月中は応接間の卓上に置いて時折拝見している。一枚毎に挨拶を交わすような実感をもって年賀状を読むことは本当に楽しい余暇の使用法である。◆正月の三日間静かに夫婦で過した。私の読書始めは、旧臘ご贈呈下さった斎藤勇老先生の『腰折れ百首と詩十篇』と丸山真男先生の『戦中と戦後の間』であった。両書とも学問に裏打ちされた著者の豊かな人間性に富む好書で、二人の先生に対する愛敬の念を深くした。◆1月13日をもって六七歳になった。その朝館長室にバラ一〇本が美しく花瓶に飾られていた。私はしばらくバラと対座して、自分の六七歳を考えた。悔いることはなかった。このバラは女性職員達の誕生祝いであることを知り、香り高い贈り心に感謝した。◆新年早々に開催した第89回共同セミナー「人間はどこまで機械か」は岡宏子聖心女子大教授、野田春彦東大教授の企画が成功し、参加学生を満足させた。最終日の1月16日の送別パーティで、奇想天外より来るとでもいうべき、誕生祝いを私は参加者一同から贈られた。私はこれから一〇年先きに喜寿を迎える。館長の長寿を祈願して、「館長喜寿祝い準備基金」を設けてくれたのは、思いもよらぬ知恵者の発想というべきか。私はその友情に深く感謝し、一〇年先き―昭和62年1月13日に喜寿を祝っていただくように約束をした。◆秘書の加藤閑子さんが正月に千葉から持って来たという梅を館長室にいけてくれた。少し寒さがゆるんだらしく、梅のつぼみがふくらみ、一つだけ花に変った。俳句をよくする加藤さんの助けをかりて、次の一句をものにした。そんなゆとりができたかと人は疑うかもしれない。

壺に挿す梅花一輪寒ゆるむ

●利用状況

＊＝同月2回利用

10月＝四、二二八人
11月＝四、四一五人

◇10月

日本女子大学助教授　小島　蓉子
明治学院大学教授　秋元　徹
法政大学助教授　渡辺嘉二郎
学習院大学教授
東京大学教授　小泉　一郎
早稲田大学教授　坂本　義和
日本女子大学教授　内田　満
東洋大学教授　上村　悦子
東京大学教授　＊飯島　宗享
東京学芸大学教授　小出昭一郎
東京教育大学教授　関　四郎
法政大学教授　小林　達吉
駒沢大学教授　原　薫
大妻女子大学講師　中原　章吉
東京都立大学助教授　河野　武
東京大学教授　北川　修
東京工業大学教授　片岡　輝夫
早稲田大学教授　長谷川健介
東京理科大学教授　清水　望
東京大学教授　近藤　保
早稲田大学教授　久保　正彰
成蹊大学教授　佐藤　慶幸
明治大学教授　安藤　英治
東京都立大学教授　小宮書之助
東京工業大学助手　清水　誠
千葉商科大学助教授　近江　政雄
東京都立大学助教授　高木　道信
学習院大学教授　大島　一郎
東京学芸大学幕末維新ゼミ　柳田　節子
東京大学助教授　見田　宗介
東京大学教授　渡辺　正雄
東京学芸大学教授　角尾　稔
早稲田大学教授　伊藤　毅
東京大学助教授　平川　祐弘
早稲田大学教授　浅井　邦二
慶応義塾大学GGB研究ゼミ　河原　宏
早稲田大学教授
一橋大学教授　二階堂副包
早稲田大学教授　川原　栄峰
神奈川大学助教授　清田　明夫
東京都立大学教授　林　栄夫
津田塾大学教授　馬場　伸也
法政大学教授　三浦　徳弘
中央大学教授　山下　幸夫
早稲田大学教授　竹内　理三
早稲田大学教授　伊東　克己
東京学芸大学教授　大村　興道
明治大学教授　水越　潔
上智大学西語劇
鶴見大学教授　井村　君江
青山学院大学助教授　関田　寛雄
学習院大学教授　杉山　正樹
桜美林大学助教授　相馬　順一
立教女学院短大教授　小川　好雄
東京都立府中リハビリテーション学院小島ゼミナール
市川きもの学院講師研修会
東京YWCA学院英語合宿　相川　孝作
山梨大学教授　小田　延雄
産業能率短期大講師　高田恵利子
清泉女子大学講師　中村　敏昭
城西大学助教授　伊藤　満
創価大学教授　穂積秀二郎
都留文科大学教授
第85回大学共同セミナー
関東甲信越国立学校係長研修会
関東甲信越国立高専教官研究集会
第86回大学共同セミナー
三大学合同貿易論ゼミナール
日本看護協会
日本基督教団中渋谷教会＊
日本基督教団弓町本郷教会青年会
学生・社会人の読書会
洗足教会
国際経済研究会
八王子教会
計測自動制御学会
シャロームICYEリユニオン
聖書神学舎
実解析セミナー
松下電器産業＊
D・K・C

七草も過ぎ、新しい年だという実感が次第にわきつつあるこの頃です。館長さんには如何お過しでしょうか。50年夏の野外劇場の想い出ももう随分前のことのようで、懐しくて仕方がありません。未だにあの時の学生さんの何人かは劇団の芝居を観に来てくれます。そしていつも話題の中にセミナー・ハウスが入っています。本当に私にとっても素晴しい体験でした。私の中で何かが変ったという感じです。機会があれば毎年でもお伺いしたいくらいです。いま丹羽さんは文化庁の留学生としてアメリカに行っておられます。私も今年はいい仕事をしたいと思っています。

角谷栄次
（劇団民芸団員）

日野自動車販売
団地サービス
楢崎産業
バロース
小西六写真工業
柳河精機＊
東京都多摩市役所
三浦薬品
ナカヨ通信機
東京芝浦電気
明治屋

【個人利用】
一橋大学講師　佐藤　共子
群馬県立前橋女子高等学校教諭　品川　久
一橋大学助手　栗原　尚子
津田塾大学講師　今井　けい
武蔵大学教授　西山　忠範
早稲田大学学生　宮島　達
出版健保診療所　小山　隆夫
上智大学学生　今井　真澄
玉川大学学生　石川　通夫
文化工房　梅岡　弘

◇11月
千葉商科大学教授　野村　隆夫
鶴見大学教授　井村　君江
上智大学ロシア語劇サークル　栗山　昭一
早稲田大学教授　深海　博明
慶応義塾大学教授　杉山　茂雄
早稲田大学教授　柘植　明子
日本女子大学教授
早稲田大学雄弁会　徳久　球雄
青山学院大学教授　小野　征夫
明治学院大学講師　池井　優
慶応義塾大学教授　古沢　常雄
法政大学助教授　大久保喬樹
東京工業大学助手　中島　康孝
東京外国語大学コンツェルト　安藤　邦広
専修大学萩原ゼミナール　矢田　俊文
東京都立大学教授　岩倉　誠一
工学院大学教授　片山　覚
東京大学助手　大宮　荘策
早稲田大学教授　西宮　輝明
法政大学助教授
早稲田大学助教授
日本大学助教授
早稲田大学教授
上智大学ＥＳＳ
明治学院大学教授　三浦　恵次
日本大学教授　瀬在　良男
東京都立大学教授　丸山　洋一
立教大学教授　牛窪　浩
日本女子大学助手　宇都　栄子
青山学院大学教授　天利　長三
上智大学教授　吉田　裕
東京都立大学助教授　川口　士郎
日本大学助教授　原田　行男
日本大学教授　向坂　寛
早稲田大学教授　吉阪　隆正
東京外国語大学教授　竹内与之助
早稲田大学国際学生友好会
早稲田大学講師　鈴木　二郎
慶応義塾大学教授　佐野　勝男
東京外国語大助教授　中島　嶺雄
早稲田大学助教授　鈴木　慎一
日本聖書神学校教授　川島　貞雄
白百合学園高等学校三年修養会
フェリス女学院大学教授　小塩トシ子
日本女子大学附属高等学校
都留文科大学講師　吉住　典子
職業訓練大学校建築科同窓会
青山学院高等部修養会
富士短期大学助教授　平野　文彦
市川きもの学院講師研修会
立正大学助教授　高村　弘毅
日本女子体育短期大学教授　日高　精二
第87回大学共同セミナー
日本国際学生協会
新生活運動協会
北海道デザイン研究所
東海教区青年研修会
日本キリスト教会東京中会青年部
東京都公立保育園研究会
鉱物学総合研究会
極東基督教連合大会
天体フレアー現象研究会
小児神経学セミナー
ボーイスカウト東京連盟西部地区
阿佐谷教会共励会
日本油化学協会
電子技術総合研究所
日本ゼオン
多摩三菱ふそう自動車販売
小西六写真工業
日本電信電話公社
武蔵野電気通信研究所
立川高島屋
日野協力会
郵政省貯金局

【個人利用】
京都府立ゼミナールハウス協力会　真継福太郎
芝浦工業大学教授　十代田知三
日本女子体育大学助教授　河田　喬夫

■編集後記

本号を編集しながら、当ハウスの日常活動の多様さ、忙しさをしみじみ感じました。（能）

余暇文明の労働問題
青沼・小泉・山田著　価一七〇〇円

社会・生活構造と地域社会
山手・石川・布施・高橋・園田・岩城　価一六〇〇円

生活者のための企業再生
名東孝二編　価一四〇〇円

ヨーロッパ見たり聞いたり
—園芸視察旅行—
川名　栄著　価一二〇〇円

損害保険の理論と実際
今井久次郎著　価二〇〇〇円

企業と人間
—変貌する職場環境—
小泉・山田・正慶編　価一五〇〇円

時潮社
文京・本郷2—12